『半世紀前の南畑』執筆20年目に向けて

～筆者 渋谷一夫さんに伺いました～

南畑公民館だより「半世紀前の南畑」の筆者である渋谷一夫さん。連載を開始されてから来年で20年目を迎えます。一口に20年といいますが、ご自身の体験をもとに南畑にまつわるさまざまな事柄をまとめて、しかもわかりやすい文章にすることは並大抵のことではないと思います。まさに南畑版『北越雪譜』といえるのではないでしょうか。

今回は、コーナーの筆者である渋谷一夫さんにお話を伺いました。

（担当／野本巳智子、大澤敦子、行川哲哉、表紀子、松下佳子、清水義昭）

プロフィール

筆者近影

渋谷一夫さん。昭和6年生まれ、82歳。昭和25年4月から28年3月まで南畑村立南畑小学校助教諭（代用教員）を勤める。

昭和32年3月、東京理科大学理学部物理学科を卒業（中学・高校の理科教員免許取得）後、同年4月から平成3年まで約34年間にわたり、学習研究社（通称・学研）に勤務する。その間、小学生対象の「学習」の編集に携わり、のちに「5年の科学」の編集長を務め、付録教材として理科の実験教材を立ち上げる。発行部数も大幅に伸長し「学習・科学」12誌で、毎月630万部を発行するまでになる。

昭和42年には、実験教材を専門に企画開発する開発設計室が設置され、部長に就任。安全審査室も兼務する。退職後、約1年半にわたり同社の編集業務に携わる。

平成5年から16年まで実験教材の専門メーカーに企画顧問として勤め、学研やベネッセの新教材の企画開発を指導する。

地域での活動

平成7年より南畑公民館だよりに「半世紀前の南畑」と題し、毎月連載を開始する。

平成9年から11年までの3年間、富士見市立東中学校でボランティアとして理科実験の特別講師を務める。翌平成12年から19年まで同中学校の特別非常勤講師として埼玉県から委嘱を受け、週3～4日勤務する。

この他に市文化財審議会委員、入間東部地区文化財保護連絡協議会理事、市遺跡調査会理事をそれぞれ5期10年。平成25年5月で任期満了。

また、市内各公民館・小・中学校で開催された「科学実験教室」や志木いろは市民大学、富士見市民大学等で講師を務める。

現役時代の思い出

学研を選んだ動機は？

高校3年生の時、父が亡くなりました。大学へ行くお金もなかったのですが、中学校の大澤校長、小学校の吉岡校長から教壇に立ってほしいとのお誘いを受けていたこともあり、3年間、代用教員として勤めました。その後、大学へ進学・卒業しましたが、教員をやったことで、今度は全国の子どもを相手にいろいろとやれたら面白いと考え、学研に就職しました。

仕事での思い出は？

雑誌の編集をしていたので、作家の新田次郎さん、深田久弥（きゅうや）さん、写真家の岡田紅陽（こうよう）さんをはじめいろんな方とも出会い、お世話になりました。

原稿の締め切りがきても、なかなか出してもらえず困りましたけど、不思議と憎めないんですよね。『火宅の人』の著者である壇一雄さんはその一人でしたが、原稿を取りに愛人との隠れ家まで行ったこともあります。

「半世紀前の南畑」の執筆について

執筆する際の苦労は？

何にでも興味があり、書きたいテーマはたくさんあります。現役時代も一年先、最低でも半年先の企画を考え、編集していたので書くことは苦労と思いません。ただ、南畑に関することとなると記述された資料があまりないので、自分の思っているような資料を探すのに時間がかかります。

テーマの見つけ方は？

人と話すことが好きで、そこからヒントを得ることもありますし、「何でも見てやろう」という主義なので、普段の生活の中から興味をもったことをテーマにしたりしています。仕事で全国各地を訪れていたので、そこからも南畑を見ることができたと思います。

最後に…

現役世代の方へ一言お願いします

私の好きな言葉に「道草」があります。これは「心の道草」のことですが、何か考えているとき、必死になってもなかなかアイデアが浮かばないこともあります。そんなときは、一度そのことから離れてみると案外パッと思い浮かんだりします。例えば、皆で考えても良い考えが浮かばないときに、「一杯行こうか！」と飲みに行き、その席で雑談中に良い考えが浮かぶことも多かった。「心の道草」に無駄はないと思いますし、ひらめきがあると感じます。

子育て世代の方へ

今の子どもたちは、自分で見て、考えるということをしないように感じます。説明すれば理解はするけど、パソコンで調べて、ただその資料を写すだけ。いろんなことに興味を持ち、自分でやってみる。体験や観察を通して、何でなんだろうと考える。自分の言葉で表現することが大切ではないでしょうか。そして、大人も子どもと遊んでいるときなどに、「どうしてなのかな」と質問を与えることです。すると子どもは自分で考えるようになっていきます。

今後、取り組みたいことは？

お世話になった方々との思い出や旅行に行った時のハプニング、そして、これまで研究してきたことなど、まとめてみたいと思います。

取材を終えて

渋谷さんは、「私の好きな言葉は、道草です。それも心の道草です。」とにこやかに話されました。そして、人との出会いを大切にされており、「人から学ぶことはたくさんあります。公民館だよりの寄稿も、懐かしみ、楽しんでいただければ幸いですが、これもまた自分自身の勉強です。」と語っていました。

また、「一日の終わりは日誌を書いてから」と、現役時代は作業日報として、現在は作業日誌として数十年間にわたり、書きとめられた日々の出来事は、大学ノートにきちんと整理されていると聞きました。

いろんなことに好奇心を持ち、心にゆとりを持つことは大切なことだと思いますし、それを忘れないよう、大学ノートに整理している普段があるからこそ、「半世紀前の南畑」を20年も執筆することができるのだと、改めて敬服いたしました。

公民館だよりの編集委員として、少しでも渋谷さんの行動を見習わなければと肝に銘じながらの取材でした。これからも、ますますお元気でお過ごしいただきたいと思います。

▶現役時代から現在まで書き続けられている日誌。大学ノート1ページを縦に3等分し、3日分が書き込める。その日のスケジュールや世の中の出来事などが書かれている。半世紀前の南畑を執筆する際にも備忘録として活用しているそうです。